

- 原著 -

最近10年間の新潟大学歯学部附属病院第二口腔外科
入院患者の臨床統計学的検討

青山玲子, 高木律男, 星名秀行, 小野和宏,
永田昌毅, 飯田明彦, 福田純一, 小林龍彰

新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻
口腔健康科学講座 顎顔面口腔外科学分野
(旧口腔外科学第二講座)

Clinico-statistical Observations on the Inpatients During
Last 10 Years at the 2nd Department of Oral and
Maxillofacial Surgery in Niigata University Dental Hospital

Reiko AOYAMA, Ritsuo TAKAGI, Hideyuki HOSHINA,
Kazuhiro ONO, Masaki NAGATA, Akihiko IIDA,
Jun-ichi FUKUDA, Tatsuaki KOBAYASHI

*Div. Oral and Maxillofacial Surgery, Niigata University
Graduate School of Medical and Dental Sciences
(2nd Department of Oral and Maxillofacial Surgery)*

平成13年12月1日受付 12月1日受理

キーワード：臨床統計的観察，入院患者，口腔外科，年次推移，病診連携

抄録：近年，少子高齢化に伴う医療事情の変化は著しく，歯科においても疾病構造の変化や受診される年齢層の変化という形で現れており，医療を提供する側は，いち早くこれらの変化をとらえ，患者のニーズに沿った対応が必要である。特に大学病院では，これまで通り教育病院・高度先進医療病院であると同時に，地域に根ざし，近隣の歯科医師との連携のもと，住民がより快適に，かつ，より高度な医療をいつでも提供されるよう努めることが要求される。このように地域基幹病院として果たす役割の中で，入院下での管理は病院の特色を活かす重要な点である。そこで，今回私たちは当科の入院患者の動向と今後の改善点を把握することを目的に，平成元年12月から平成11年11月までの10年間に，当科に入院した患者について，臨床統計学的に検討した。

その結果，1)入院患者総数は，延べ3,481人で，男女比はほぼ1:1であった。2)疾患別では，唇顎口蓋裂を中心とした奇形が，1,216人(40.5%)と最も多く，年齢別では，30歳未満が過半数を占めていた。3)居住地別では，新潟市内822人(27.4%)，市内，佐渡を除く下越が1,057人(35.2%)と下越地方の患者が6割以上を占めていた。

これらの結果を踏まえ，今後の展望として，以下の点が確認された。1)入院施設を有効に利用するためには，入院の対象となる歯科疾患の中で，大学病院という集学的な治療を活かすことを考慮に入れて対象疾患を選択し，その分野での専門的な治療体制作りが必要である。2)治療体制の整備の一環として，新潟県各地に入院施設を持つ病院歯科・口腔外科が新設されつつある中，今後は新潟市内のみでなく，より広い範囲で各病院歯科との役割分担の確立(病診連携)も重要である。

Abstract : We have evaluated clinico-statistically 3,481 inpatients from December 1989 to November 1999, for ten years at the 2nd Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Niigata University Dental Hospital .

As results of this evaluation, we reported following conclusions.

- 1) The man-and-woman ratio was approximately 1:1 (50.8% : 49.2%).
- 2) Cleft lip and/or palate and related anomalies were most common (40.5%), following malformations (12.8%), malignant tumors (10.5%), and cystic lesions (9.5%).
- 3) Therefore the first and second decades were most popular in our hospital.

緒 言

近年、少子高齢化に伴う医療事情の変化は著しく、歯科においても疾病構造の変化や受診される年齢層の変化という形で現れており、医療を提供する側は、いち早くこれらの変化をとらえ、患者のニーズに沿った対応が必要である。特に大学病院では、これまで通り教育病院・高度先進医療病院であると同時に、地域に根ざし、近隣の歯科医師との連携のもと、住民がより快適に、かつ、より高度な医療をいつでも提供されるよう努めることが要求される。このように地域基幹病院として果たす役割の中で、入院下での管理は病院の特色を生かしうる重要な点である。そこで、今回私たちは当科の入院患者の動向と今後の改善点を把握することを目的に、平成元年12月から平成11年11月までの10年間に、当科に入院した患者について、臨床統計学的に検討した。

対象および方法

平成元年12月から平成11年11月までの10年間に、新潟大学歯学部附属病院第二口腔外科に入院した患者総数は延べ3,481人で、男女別では男性1,768人(50.8%)、女性1,713人(49.2%)で、男女比はほぼ1:1であった。調査項目は、1)通常・短期別入院患者総数、2)疾患別入院患者実数、3)年齢別入院患者実数、4)居住地別入院患者実数およびそれらの年次推移と、5)月別入院患者総数である。尚、患者総数は年間入院患者の延べ数としたのに対し、患者実数は1年間に複数回入院した場合も1人として扱った。また、通常・短期入院の区別については、入院期間が1週間以上におよぶような症例を通常入院、外来小手術症例のような術後管理のみのための数日の入院を短期入院として、便宜的に区別した。

結 果

1) 通常・短期別入院患者総数

入院患者総数は、前期の平成2年(平成元年12月~平成2年11月以下同様)から平成6年にかけては年間250人から300人前後であったのに対し、後半では平成7年の463人、平成8年の457人をピークとし、年間350人から450人前後を推移していた。この変化は通常・短期入

院ともに認められたが、短期入院でより著明であった。(図1)

2) 疾患別入院患者実数

唇顎口蓋裂を中心とした奇形が1,216人(40.5%)と最も多く、次いで変形症が385人(12.8%)、悪性腫瘍が314人(10.5%)、嚢胞が285人(9.5%)であった(図2)。これを年次推移で見ると、奇形、変形症および歯疾患で、平成7、8年にピークが認められたのに対し、悪性腫瘍では、年々わずかずつであるが増加していた(表1)。

3) 年齢別入院患者実数

0から9歳が最も多く800人(26.7%)、次いで10から19歳649人(21.6%)、20から29歳478人(15.9%)と30歳未満が大半を占めていた(図3)。年次推移では、0から9歳、30歳から50歳台で大きな変化が無かったの対

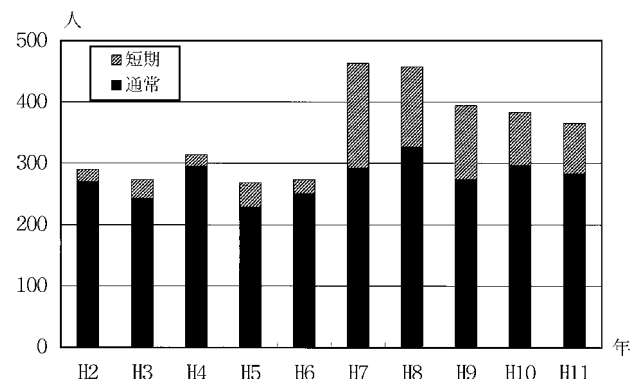


図1 通常・短期別入院患者総数の年次推移

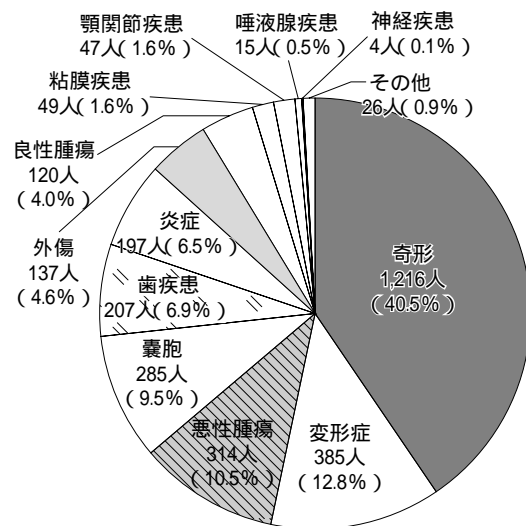


図2 疾患別入院患者実数と割合